「十字架の死に至るまで」　　2017 年 12 月 29 日

フィリピの信徒への手紙 2 章 1 節～11 節　そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

パウロはフィリピ教会に「キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、 同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください」と言っている。「心があるなら」と言っているが、心があることを知って、感謝と喜びを持って書いていることは確かである。そして、「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい」と勧めている。「互いに相手を自分より優れた者と考え」という言葉に惹かれる。人は自分を高みに置き、相手を低く見がちであるが、パウロは逆に、相手は自分より優れている者と考えなさいと諭している。その思いでいれば、必然的に、互いに謙遜、謙虚になるであろう。この勧めはキリスト・イエスに根拠があると語っている。ここから、パウロのキリスト論が展開されている。

キリストは、神と等しい身分の者である。パウロは復活した主イエスに出会った時、死を超えた永遠の神としてのキリストを見た。そこで、主イエスを自分の罪を赦し、義としてくださる救い主として受け止めた。イエスはキリスト・神ご自身であると信じたのである。キリストは神であるにもかかわらず、神であることに固執せず、自分を無にして、僕の身分になり、人間になられた。ナザレのイエスという人間の姿で現れた。人になられたキリストはへりくだり、死に至るまで、十字架の無残な死に至るまで、神に従順であられた。神はキリストの十字架の死において赦しの救いを与えられた。キリストは神のご意思に徹底的に従われ、従順を貫かれた。神はキリストの従順を認め、高く引き上げ、全ての名に勝る名をお与えになられた。キリストの地に下った卑賤と天に昇られた高挙である。神の高さから地のどん底の十字架まで下り、神まで引き上げられた。ここに、天と地を結ぶ、インマヌエル（神は我らと共におられる）の救いが成就した。それ故に、天上、地上、地下のもの全てが、主イエスの御名にひざまずいて、「イエス・キリストは主である」と告白し、父なる神を称えるのである。「十字架の死に至るまで」下られたキリストに救いがある。パウロの信仰は、このキリスト論に尽きる。キリストの卑賤の十字架に連なり、キリストの高挙の復活の命に達したいと願ったのである。